



#33

ありのままの君でいて……

著: 藍澤たすく

イラスト: かもめ遊羽

「武笠さん、好きです！ ぼ、僕とつきあってください！」

「え？」

大野井不二夫は下校途中の武笠志乃に向かい、ありったけの勇気を振り絞ってそう告白した。しかしその声に振り返った黒髪の少女は、少し戸惑いの表情を浮かべて沈黙してしまった。それは、ほんの2、3秒の静寂。

だが不二夫にとっては、この15年の人生にも匹敵するほど、長い長い静寂だった。

「ごめんなさい……」

「！」

永遠に続くかと思われた静寂は、志乃のためらいがちな断りの返事で打ち破られた。

不二夫はがっくりと肩を落とす。

「やっぱり僕なんかとじゃ……」

「ううん、そうじゃないの！」

あからさまに落胆した不二夫に、志乃は慌てて言葉を続ける。

「あたしも……大野井くんの事……嫌いじゃないけど……でも……」

「でも？」

「大野井くんが本当のあたしを知ったら、絶対嫌いになるから……」

「そんなことないよ！」

不二夫がずい、と志乃の方に歩み寄る。

そしてここぞとばかりに畳みかける。

「僕は武笠さんの事嫌いになつたりなんかしない！ 絶対しないよ！ だって……だって、中学に入ってからこの3年ずっと憧れ続けてきた人だもの！」

「大野井くん……」

「いつも窓の外を物憂げに眺めている武笠さんも！ 図書委員として黙々と仕事をこなす武笠さんも！ 近所の猫にそっとえさをあげてる武笠さんも！ それから、それから……」

感情が高ぶったあまり、大声で叫んでしまった不二夫は今さらながら恥ずかしくなってきた顔を真っ赤に染めた。

確かに志乃はおとなしい性格で、クラスでは決して目立つ存在ではなかったが、その清楚な佇まいに隠れファンは多い少女だった。

「……本当に？」

「え？」

「本当にあたしのこと、嫌いにならない？」

志乃が上目遣いに、どこか懇願の色を帯びた瞳でそう尋ねてくる。

「もちろんだよ！」

不二夫は胸を張ってそう応えた。

その想いには一点の曇りもない。

「……嬉しい……」

志乃は口許に手を当て、囁くようにそう言った。

「あたしで良ければ……よろしくお願います……」

志乃はおずおずと右手を不二夫に差し出した。

不二夫はしばらくの間、その手と志乃の顔を交互に見つめていたが。

「やったー!」

感極まったのか、不二夫は飛び上がってガッツポーズを決める。

そして不二夫は志乃の右手を両手でしっかり握ると、その目を潤わせた。

やっぱり思い切って告白してよかった……!」

僕はやった! やり遂げたぞー!!

その瞬間。

「ママー!」

一人の女の子がはす向かいの保育園の中から志乃に向かって飛び出してきた。

年の頃は3、4歳といったところだろうか。

泥遊びをしていたのか、その両手は真つ黒だった。

「まあまあ、綾ちゃん、そんなに汚しちゃって……だめでしょう?」

「えへへへへ、ごめんなさーい」  
「え? ま、ママ……?」

学生靴から取り出したタオルで幼女の手を拭く志乃の姿を不二夫は呆然として見つめていた。  
「可愛いでしょう? あたしの娘なんです。ほら、綾ちゃん、新しいパパにちゃんとご挨拶して」

「えへへへ、あたしあやだよ! こんにちは、パパ!」

「パ、パパ……?」

拭かれて綺麗になった手をぶんぶんと振る綾に、不二夫はひきつった笑いを浮かべて小さく手を振り返した。

「えっと……歳の離れた妹さんとか……? だよね?」

「いいえ、娘です」

きっぱりと言いつける志乃。

沈黙。

今度こそ長い、長い静寂が訪れた。

「本当……なの……?」

「はい……」

そう言いつて志乃はうつむき、ためらいがちにこう続けた。

「あたし……バツイチなんです……」

「えっ!？」

衝撃の告白に不二夫はどうしていいのか判らず、ただただ立ち尽くすだけだった。

え? え? バツイチって結婚してたってこと? そして今は離婚してるってこと?

つていうか日本で女子が結婚できるのは確か16歳からのはずだから……つてことは武笠さんは今、何歳? あれ? あれ?

困惑のあまり、不二夫はフリーズしてしまった。頭の中でぐるぐると疑問が無制限ループする。その様子を見て、志乃は寂しげな笑みを浮かべた。

「ね? やっぱり、あたしのこと嫌いになったでしょう?」

綾をあやしなから、志乃は伏し目がちに呟いた。

「でも、いいんです。これまでもみんな、そうでしたから……。仕方ないですよね……」

志乃はタオルを鞆にしまうと、綾の手をきゅつと握った。

「さ、帰りましょう、綾ちゃん」

「あれー? パパはー? いっしょにこないのー?」

「パパはね、やっぱりパバじゃなかったのよ……」

「えー、そんなのつまんなーい!」

綾の言葉が不二夫の胸にぐさりと刺さった。

「ちよ、ちよつと待って!」

綾の手をひいて帰ろうとする志乃を、不二夫は大声で呼び止めた。

不二夫は心の中で激しく自問自答していた。葛藤していた。

果たして志乃に対する自分の想いは、その程度のものであったのかと。

このぐらいの事で彼女が嫌いになってしまう程度のものであったのかと。

この歳で結婚していて、しかも子供がいるなんて、きつと武笠さんは大変な思いをして生きてきたに違いない。

本当に好きならそうした事もすべて受け止めてあげるのが、本当に「好き」ってことなんじゃないのか?

僕は……ただ逃げているだけじゃないか?

武笠さんに憧れ続けた3年間は、ただの虚像だったのか?

不二夫はぎゅつと両拳を握った。

「……僕はやっぱり武笠さんのことが好きです!」

「え?」

改めて、叫ぶ。

「武笠さんがバツイチだろうが、子持ちだろうが、武笠さんは武笠さんです! 僕が好きになった武笠さんです! だから、つきあって下さい!」

不二夫は頭をさげて、改めて両手を差し出した。

「大野井くん……」

志乃は目頭が熱くなるのを抑えられなかった。

「本当に……いいの？」

「もちろん！」

不二夫は顔を上げて志乃を見つめた。

その瞳には、一点の曇りもなかった。

「ありがとう……」

志乃はそっと不二夫の両手を握り返す。

「？ それは？」

志乃が突然、鞆の中から何かを取り出した。

それは銀色の綺麗なプレスレットだった。

不二夫は志乃が取り出したプレスレットを不思議そうに見つめた。

「これ……大野井くんに持っていてほしいの……あたしのお父さんの形見だから……」

「えっ!？」

志乃がそっとプレスレットを不二夫の右手にはめる。

プレスレットには青く澄んだ宝石が取り付けられていた。

「そんな大切な物……僕なんかには、いいの？」

「いいの。本当に大切な人が現れたら、これをあげなさい……って、お父さん言ってたから……」

「……!？」

今度は不二夫の目頭が熱くなっていった。

夕陽が二人のシルエットをオレンジに染めていく。

二人はまたぎゅっと手を握ったまま、徐々に顔を近づけていく。

そしてその唇と唇が重なるうとした瞬間。

「大野井くん、危ない！」

「!？」

突然、不二夫は志乃に突き飛ばされた。

思いのほか強い力に、不二夫はそのまま路上を転がり、電信柱にしたたかに背中を打ちつけてようやく止まった。

「……ててて、武笠さん、いったい何を……」

言いかけて不二夫は息を呑んだ。

なぜなら先ほどまで自分が立っていた道路に大きな穴があいていたからだ。

「これは……」

同時に不二夫の頭の上で鋭い金属音が響き渡った。

「!」

音のする方を見上げて不二夫は言葉を失った。

志乃が、同じぐらいの年頃の赤毛の少女と、戦っている!?

いつの間にか手にした日本刀で、志乃は鋭い斬撃を繰り返している。

対する赤毛の少女もレイピアのような剣でそれを的確にかわしていた。

二人は公園の時計塔から電信柱へ、電信柱から高層マンションへと飛び移りながら激しい攻防を繰り返していた。

とても人間業とは思えない戦いだっただ。

「いったい……何が……起こって……るんだ……」

不二夫が尻餅をついたまま呆然と眩く。

そして彼はある違和感に気がついた。

周囲に生き物の気配が全くしない。

見るといつの間にか周りには不二夫たちしか存在しなくなっていた。

保育園で遊んでいた園児たちも、街を賑わす雑踏も、掻き消すように無くなっている。

まるで不二夫たちのいる周辺だけが異世界に隔離されたように……。

「あや! プリズムスパークオーバーレインボウよ!」

「わかったー、ママー!」

空中からの志乃の指示に従って、綾が両手を組む。

やがてその両腕全体が発光し、眩いばかりの光球を形作り始めた。

不二夫はそれをほかんと口を開けて見つめていた。

「ぶりずむ、すぱーく、おーばーれいんぼー!!」

気合一閃、綾が光球を赤毛の少女めがけて投げつける。

しかしそれが着弾する寸前、赤毛の少女は志乃と素早く体を入れ替えた。

「……っ!」

「ママー!」

綾の放ったプリズムスパークオーバーレインボウが志乃に直撃する。

彼女は糸の切れた操り人形のように全身の力を失い、そのまま地上へと落下してきた。

「武笠さん!」

不二夫が志乃に向かって大声で呼びかける。

しかし志乃からの返事はない。

見ると彼女の制服はぼろぼろであちこちから肌が露出していた。

その表情は苦悶に満ち、息づかいも荒く、ダメージが深刻なことは誰の目にも明らかだった。

「終わりだな、プリズム・ライオット・ヴァルキュリアよ」

赤毛の少女がレイピアを手に、つかつかと志乃に近づいてくる。

「おおの、い、くん……その、プレスレットで……は、早く……」

「え？」

志乃が喘ぐような声で不二夫に呼びかける。

不二夫がプレスレットを見ると青い宝石がゆつくりと明滅していた。

「ばー、ぶりずむすばーくおーばーれいんぼーだよー!!」

綾が大声で不二夫に呼びかける。

「え？ え？」

「ほう、エクスタリカの保持者がもう一人いたとはな……これは今のうちに始末しておかないと厄介なことになるぞうだ……」

鋭い瞳で不二夫を睨みつけた赤毛の少女は、つかつかと不二夫の方に向かってくる。

「あわわ……プ、プリズムスパークオーバーレインボー!!」

不二夫は無我夢中で叫んだ。

すると不二夫のプレスレットから巨大な光球が形成され始めた。

その大きさは綾のそのの5倍……いやそれ以上の大きさがあった。

「ば、ばかな!? これだけのエクスタリカを一度に放出できる者など存在するわけがな……」

赤毛の少女は不二夫の撃ったプリズムスパークオーバーレインボウに呑み込まれ、瞬時に消えてしまった。

「やった……のか……?」

「すーい、バパー!」

その場へへたり込んだ不二夫に、綾がきゅきゅととはしゃぎながら抱きついてくる。

どうやら自分は本当に、あの赤毛の少女を倒してしまったようだ……。

「すごいわ、大野井君……初めてでそれだけのプリズムスパークオーバーレインボウを出せる人はなかなかいないわ……」

志乃がよろよろと不二夫の方に向かってくる。

「武笠さん、今のは一体……?」

「ギルモアイギムからの暗殺者なの……あたしを亡き者にすれば、後継者を失ったイミグレイシス皇国は滅びてしまうから……それが奴らの狙いなよ……」

「そ、そう……」

不二夫は正直半分も理解できなかったが、さっきの壮絶な戦闘を思い起こすとただただ曖昧に頷くことしかできなかった。

「それにしてもかなり念入りに次元転移していたのに嗅ぎつかれるなんて……ここは危険

「だわ。大野井くん、早く行きましょう」

「行きましょうってどこへ……わっ!？」

不二夫は頭上を見て驚いた。

そこに巨大な円盤UF0が浮かんでいたからだ。

「ここにはまたいつギルモアイギムの連中に襲われるか判らないわ。一度母星のエレンシアに戻りましょう」

「うん、ママ!」

「ほ、母星って?」

「はい。だってあたし達、宇宙人ですから」

にっこりとそう告げる志乃に不二夫は言葉を失った。

「さ、早く。大野井くんにはもっともっと『本当のあたし』を知ってもらいたいから……」

「は、はは……」

志乃に手を取られた不二夫は、そのままUF0から発せられる光線によって空中へと静かに浮遊していったのだ……。

おしまい